

小学校・幼稚園教諭および保育士養成課程における 絵本制作の授業の効果

～音楽・演劇との教科横断型授業の展開を通して～

古屋祥子*¹・村木洋子*²・高塩景子*³

キーワード：絵本制作、教科横断型授業、美術、音楽、演劇、教員養成

1. はじめに

現在、芸術表現のジャンルにおいても多様化が加速し、美術や音楽、文学やパフォーマンスなどの既知の領域を横断した表現や、領域の重複するアート作品などが数多く生み出されている。学校教育においても、STEAM教育への関心の高まりなど、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成が重要視されている。一方で、小学校教諭養成課程における大学での表現系の授業は「表現領域指導法（美術）」「表現領域指導法（音楽）」「表現領域指導法（演劇表現）」というように、教科ごとの枠組みで設けられているケースが多い。表現の領域ごとに専門性を磨く学びは当然重要であり、基礎力をつけることは展開力の要にもなるが、領域を横断した考え方や統合した活用力、また、子どもの内的必然性を尊重した多様な活動実践ができる対応力を高めることも同時に、これからの教員や保育者の養成には求められる資質である。

これに応えるためのカリキュラムとして、オペレッタの創作・上演などの総合的な表現活動に取り組む授業実践を取り入れている養成校も多く、筆者らも、その指導経験から教育的効果を実感してきた。大規模な創作による協同的な活動体験は、表現領域の重層による効果を体感することができるだろう。しかし、大規模でなくとも、表現の各領域における授業連携により実施可能な取り組みはある。その一例として、本研究では、美術の授業で制作する絵本づくりに焦点を当て、この成果物を音楽や演劇の授業において活用・展開する取り組みを紹介する。大学生が自らの表現を様々な展開できることを体験することで、どのような学びがもたらされたかを考察するとともに、子どもたちの伸びやかな表現を引き出すことのできる教員・保育者養成のために、養成校としてどのような表現指導を行えばよいか検討することを研究目的とする。

2. 研究方法

小学校・幼稚園教諭、保育士養成課程における大学生の絵本制作の授業実践を紹介し、その教育的効果について、履修者の授業評価をもとに検証する。加えて、この授業の成果物を音楽と演劇の表現の授業で活用した実践例を通して、教科横断的な学習の効果について考察する。

研究における倫理的配慮として、授業履修者には口頭で研究の意図と概要を説明し、協力の上承を得た。

(所属)

*1 山梨県立大学 *2 尚美学園大学 *3 共栄大学

3. 授業の実践 「表現領域指導法（美術）」における絵本制作

(1) 授業の概要

第一筆者は大学における絵本制作の授業を15年にわたり担当してきたが、今回実践事例として取り上げるのは、2023年に実施した授業「表現領域指導法（美術）」（担当教員：古屋祥子）における絵本制作の取り組みである。授業の概要は以下のとおりである。

- ・対象：A大学2年次33名（「表現領域指導法（美術）」（演習2単位・前期7回）履修者）
- ・実施場所：A大学造形演習室
- ・実施内容：表1参照

日	回	内容
4/13	1	解説：絵本とは 絵本の魅力 制作するにあたってのポイント 作例紹介：『赤ずきんちゃん（Les Doigts Qui Rêvent）』『あおくんときいろちゃん』、『ねずみくんのチョコッキ』
	2	解説：ストーリー・ページ数・ページ割・大きさについて【あらすじ完成】 豆本づくり レポート課題：「私の好きな絵本（絵本作家）について」
4/20	3	作例紹介：『へいわとせんそう』、『旅の絵本』、『お野菜戦争』、『ミミズのおっさん』等 解説：テーマ(主題)とモチーフ(素材) お話創作① 【ページ割コンテ完成】
	4	解説：お話の組み立てと絵本の中の文章 お話創作② 【下書き作画】
4/27	5	作例紹介：『ちいさなあなたへ』、さわる絵本類 解説：ページ割と構図による効果 絵を描く① 【下書き完成】
	6	解説：絵本の絵の特徴 絵を描く② 【着彩・作画】
5/11	7	作例紹介：『こんとあき』、『ねないこだれだ』 解説：描画技法・材料 絵を描く③ 【着彩・作画】
	8	解説：レイアウト(配置)について 絵や文字を描く【着彩・作画】
5/18	9	作家紹介：駒形克己、ブルーノ・ムナーリ、谷川俊太郎、岩井俊雄 解説：本の構造について 作画仕上げ 【作画完成】
	10	製本作業の説明 製本② 【奥付き完成】
5/25	11	作例紹介：バムケロシリーズなど 製本① 本体の貼り付け 【本体糊付け完成】
	12	製本② 表紙の作り方 【表紙完成】
6/1	13	製本③ 裁断 【完成】
	14	作品発表①（鑑賞・講評）感想を相互にコメント
6/8	15	作品発表②（鑑賞・講評）感想を相互にコメント 自己評価レポート

表1

(2) 授業の導入

以下3つの取り組みを通して、絵本について理解を深め、自分の好みや作りたいものを明らかにしていくプロセスとした。

①絵本の種類を紹介

物語絵本、民話絵本、科学絵本などの内容的区分、大型絵本、小型絵本、仕掛け絵本（ポップアップ絵本、メリーゴーラウンド型絵本）などの様式的区分を踏まえて、布絵本、版画絵本、切り絵絵本といった画材的区分や、赤ちゃん絵本、幼児絵本、大人のための絵本といった対象年齢別の区分もあること、自身がどういう種類のものを作りたいのかを考える材料とした。また、点訳絵本、さわる絵本、バリアフリー絵本などの障害者用という分類があることも意識するようにした。

②レポート課題「私の好きな絵本または絵本作家について」

市販絵本から自分の好きだと思うものを選び、その理由を考察させることで、自分の好みや、良いと感じるポイントを明らかにする。色使いや絵のタッチなど絵の雰囲気や重要視する場合や、物語の内容や世界観に重きを置く場合など、様々なケースが見受けられた。

③市販の絵本の解説

さまざまなバリエーションのある絵本において、効果的な手法などを解説しながら紹介する。例えば、フランスの Les Doigts Qui Rêvent が作る手作り絵本を取り上げて、抽象表現の魅力や素材感の影響、蛇腹製本の有効性などを話した。

(3) 授業の進行

①アイデア出し

対象年齢を定め、話の長さ（枚数）や主人公の印象を意識して、実体験や自身で感じたことをもとに創作する。

②絵コンテ（ページ割）

ストーリー展開や構成に注力して、ページを割り振り大まかな構図を決める。

③画材・素材研究

創作した話を伝えるのに効果的な画材等を選ぶために試作をする。

④作例紹介

各授業の始めに、ビジュアル効果を有効に使った作例をもとに解説をして、作画における構図や文字レイアウトなどの具体的な作業に結び付けてデザインの勉強をする。

⑤製本

ソフトカバー製本の方法を学び、接着・裁断を行う。

⑥発表

自作について読み聞かせや解説を交えて紹介する。

⑦相互評価

履修者同士、コメントをしあう。

⑧自己評価

自作について振り返る。

4. 学生作品介绍

以下、特徴的な成果物を紹介する。

(1) 学生A『おかあさんにおこられた』

アイデア出しに時間をかけ、実体験をもとにした子どもの気持ちを語る表現となった。画材選びや構図の効果に注力し、シンプルな絵柄を活かすブックデザインとなった。



図1 学生A作品 部分

(2) 学生B『ゆびのこびと』

布絵本に興味を持ち、対象年齢を意識した仕掛けや遊びを取り入れた布絵本となった。強度や製本、色使いにも配慮できた。



図2 学生B作品 部分

(3) 学生C『あかいろみっけ』

色覚異常のある学生が自身の特性を活かす制作内容を模索した。明度に対する感度の良さを活かした表紙づくりは、個性の発揮と特性理解の両面の学びがあり、他の履修者にとっても学びとなった。



図3 学生C作品 部分

5. 絵本制作における教育的効果の考察

絵本制作の授業全15回を通しての感想や、自身の作品についての自己評価コメント（いずれも授業後に Google Classroom にて回答）から、学生の学びについて考察する。

【学生Aコメント】

私が絵本製作をするにあたって一番こだわった部分が絵本の内容である。ストーリーにメッセージ性があるものに仕上げたいと考え、自分自身が今まで生きてきた中で感じてきたことを表現することにした—中略—それが、見てくれた友達にも共感できる部分があるといってもらえたのでとても嬉しかった。

【考察】

テーマを決めることに時間をかけて、作者がこれまでに感じてきた感情と向き合い、整理しながら制作する様子が見受けられた。この工程に時間をかけたことが、自分らしい表現の追求に繋がり、他者にも共感してもらえる内容となったと言える。制作を通して自己表出という体験をし、他者に開示して一定の評価も得られたことで自信にもつながったと考えられる。

【学生Bコメント】

布絵本を作ってみて、時間がかかってとても大変で、絵本作家の方の凄さを感じました。授業の冒頭でいろいろな絵本を紹介してくださり、素敵な絵本をたくさん知ることができて良かったです。これからもいろいろな絵本に触れてみたいと思いました。また、友達の作品を見てみて、絵本の内容や絵の描き方、工夫点などが様々でとても楽しかったし、自分もこのような視点で絵本を作りたいと思うものがたくさんありました。またじっくり見てみたいです。

【考察】

制作体験を通して、作り手の目線を持ち、市販の絵本を見直すことができている。また、他の履修者の成果物についてよく鑑賞し、その良さを吸収しようとする前向きな姿勢を持ち、絵本に対する興味や理解が深まっている。

【学生Cコメント】

私は、これまで色覚異常で自分を表現することや自分が見えている色などをみんなに共有することが怖くてできませんでした。しかし、講義中に紹介していた本によっていろいろな見え方をしている人がいることをみんなにも知ってもらえて嬉しかったです。さらに、授業時間外にも「見えづらい色になってない？」など色についてみんなが興味や関心を持ってくれたきっかけにもなって、悲しい思いをする子どもを減らすことにつながるかなと思います。

色については、ネガティブな考えしかしていなかった私ですが、色の濃さがわかるという特徴を見つけてもらったおかげで「色＝嫌い、苦手」の考えから「色＝みんなよりも明度がわかる」というポジティブな考えになりました。

【考察】

制作をしていく中で、自身の障害について開示し、その特性の理解において、部分的にはあっても肯定的に捉える機会となったことは大きな成果と言える。

上記3名の学生のコメントやそれ以外の学生の声からは、絵本制作が過去や将来とのつながりを意識しながら、今の自分を振り返る効果についての言及があった。ちょうど学生が20歳になる学年での履修と重なることから、子ども時代の絵本との関りを振り返りながら、今の自分の考えをまとめること、さらに、今後絵本を活用しながら教育・保育に携わる自分をイメージしながら、子どもに伝えたいことを形にするという体験は、少なからず印象に残る活動となったと言える。元々絵本は「子どもが最初に出会う文化財」と言われるように、人の想いが優しい言葉と絵で凝縮された媒体であり、今の自分に向き合って、20歳の自分を残す・可視化することに大きな意味があると考えられる。

また、デザインや描画、製本技術など、美術の様々なジャンルについて横断的に学ぶことへの言及もあった。さらに、国語や道徳、哲学などへの連結、また保育・教育学にもつながる学びがあることもわかった。

6. 教科横断型・連携授業の実践1 音楽

(1) 連携授業の概要 「表現領域指導法（音楽）」における展開

ここからは、2021年度に行われた「表現領域指導法（音楽）」（担当教員：村木洋子）における授業実践について紹介する。

- ・対象：A大学2年次32名
（「表現領域指導法（音楽）」（演習2単位・後期15回）履修者）
- ・実施場所：A大学講堂
- ・実施内容：授業内容（表2）のうち、第11回～14回の「模擬保育」で『「絵本制作」での自分たちの成果物から1作品を任意に選択し音楽的要素を加える』模擬保育をグループ（4名）で実施した。

(2) 授業の導入

それまでの授業内容としては、保育で使用される曲を和声分析することにより、初心者でも演奏しやすい和音の配置や代表的な和声進行を理解し、即興的に対応できる方法を実践し、わらべうたの分析からは民謡音階などを学び、それらを活用して絵本を使用した模擬保育に臨んだ。

また、既存の絵本に教員が音楽的要素を加えた以下の8例を提示し考察した。

【文章を民謡音階で歌う】同じ言葉の繰り返しや擬態語が多い作品

例1・くつつあるけ（林明子）1986福音館書店

例2・あめぼったん（広川沙映子）1999アリス館

【文章を全音階で歌う】登場人物の心情が言葉に込められている作品

例3・ともだち（ジョン・バーニンガム）1976富山房

【音域の広狭が特徴的なBGM】物語の遠近感や登場人物の増減が主となる作品

例4・おーいみえるかい（五味太郎）2005教育画劇

例5・あかいかさ（ロバート・ブライト）1975ほるぷ出版

【和声の変化が特徴的なBGM】物語の軸が、定点での変化を表現している作品

例6・おつきさまこんばんは（林明子）1986福音館書店

【無調で効果音的なBGM】ミステリアスな要素や解釈が無限な作品

例7・ねないこだれだ（瀬名恵子）1969福音館書店

例8・かぶさんとんだ（五味太郎）1985福音館書店

①	9/30	オリエンテーション、担当伴奏曲の紹介と選択
②	10/7	0～1歳児の音楽的な遊びに見る発達
③	10/14	音程と和音
④	10/21	2～3歳児の音楽的な遊びに見る発達
⑤	10/28	わらべうた
⑥	11/4	コードネーム
⑦	11/11	4～5歳児の音楽的な遊びに見る発達
⑧	11/18	伴奏法
⑨	11/25	幼児のリトミック
⑩	12/2	模擬保育指導案
⑪	12/9	模擬保育 グループ①②
⑫	12/16	模擬保育 グループ③④
⑬	1/6	模擬保育 グループ⑤⑥
⑭	1/13	模擬保育 グループ⑦⑧
⑮	1/20	まとめ

表2

(3) 学生による模擬保育の実践例と参加学生からの感想

模擬保育を実践した8グループの音楽的要素により以下5つのスタイルに分別して紹介する。感想には参加した学生が設定年齢の幼児の気持ちになってのものも含まれる。

1) 文章を民謡音階で歌うスタイル

《学生Dの作品「だれのこえかな」》(グループ②)(譜例1)

実践内容：いろいろな動物が登場、その時の問いかけが同じセリフで歌われた。



譜例1

感想：わらべうたで自然に語りかけているようで、リズムも心地よかった。

《学生Eの作品「まるさんかくしかく」》(グループ⑥)(譜例2)

実践内容：身近な物の形を問いかける時、解答が揃ったときのセリフが歌われた。伴奏の和声は弾きやすいように展開形も使っている。



譜例2

感想：音程をつけて問いかけられたので、耳に残った。繰り返したので覚えやすく歌えた。

2) 文章の一部を抑揚をつけて表現するスタイル

《学生Fの作品「どんなおなら」》(グループ⑦)

実践内容：オノマトペ、たとえば「プリン」高速高音の連続、「ブー」リップロール、「ブー～」低音から高音へのポルタメント…など、読み方に工夫を凝らした。

感想：おならを再現する声がリアルで楽しめた。はっきりと全力で読んでいて楽しい内容が伝わった。

《学生Gの作品「へんしんつむくん」》(グループ⑧)

実践内容：主人公が3秒で変身するたびに「いーちーにーいーさーん！」と誘うように朗読すると、幼児役の学生も一緒に唱えた。

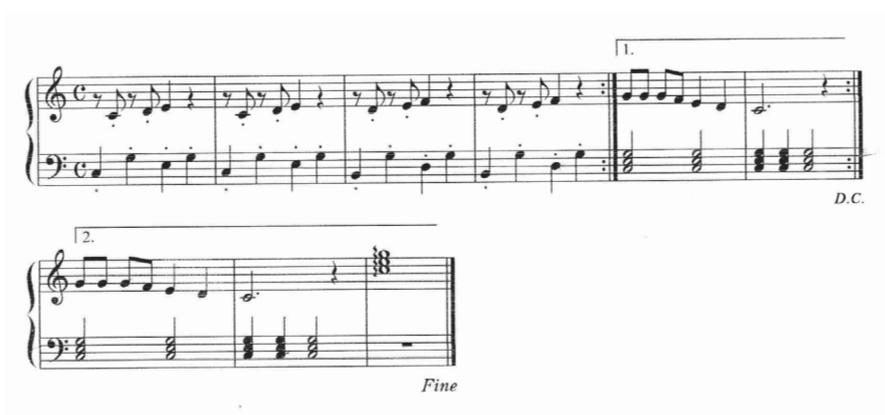
感想：楽しくなるようなかけ声、でもお話はていねいなのが伝わった。

3) 場面に合わせたBGMを作曲し演奏するスタイル

《学生Hの作品「ピーマンおいしい?」》(グループ⑤) 譜例3

実践内容: 場面に合わせた譜例3の曲を作曲し、音域や速度を変化させながら繰り返し演奏し、朗読のスピードと調整しながら同時に終わる。

感想: ピアノのスピードの変化がわかりやすく、アレンジが良かった。旋律がシンプルなのでもっと変化があると面白い。



譜例3

4) 場面に合わせたBGMを既存の曲から選択し演奏するスタイル

《学生Iの作品「わたしが〇〇だったら…」》(グループ①)

実践内容: アリ(オースティン作曲「人形の夢と目覚め」人形のダンスの部分)、ゾウ(團伊玖磨作曲「ぞうさん」)、花(湯山昭作曲「お花がわらった」前奏の部分)、月(フランス民謡「キラキラ星」)など、キャラクターにふさわしい選曲と伴奏形の変化があった。

感想: 動物たちの動きをイメージしやすい音楽が工夫されていた。

5) 場面に合わせたBGMをその他の手法で選択するスタイル

《学生Jの作品「布絵本クリスマス」》(グループ③)

実践内容: 打楽器を中心に使用。旋律はシロフォンによる「2声きよしこのよる」のみ。「忙しい」の描写はシロフォンのグリッサンド、「サンタの移動」はウィンドチャイムと鈴で場面転換を表現していた。

感想: 打楽器の種類が多くクリスマスという季節感も感じられ、視覚と聴覚と両方が刺激された。時間が長かったので繰り返しが多く感じられた。

《学生Kの作品「チューリップのピーター」》(グループ④)

実践内容: 足音、飛行機のジェット音、雨音などの擬態語(スタスタ、ビューン、ザーザー)に相応しい音を、スマートフォンアプリから選択し、絵のリアル感を増幅させた。

感想: 絵本の場面に合わせた音で子ども想像力を育てられるという考え方と、効果音は楽器でもよかったです。両方の意見がある。楽器など、目の前で音を鳴らすことも興味深い。

(4) 考察

既存の絵本に音楽的要素を加えることは以前から実践していたが、自分または同級生の作品の絵本を使ったことで、作者の意図や気持ち、作者の人柄と制作時の苦労をより深く感じ取り、絵やストーリーのどこにフォーカスを当てて設定年齢の子どもたちに伝えるか、迷うことなく取り組んでいた。オリジナル曲の作曲や、音程をつけて語るという「独自性」にこだわって実践した姿も印象的であった。学生の振り返りからも、そのこだわりは苦労とともに達成感が得られている。発表方法については「表現領域指導法（演劇）」の履修前なので、朗読のスキルや演技力が今後身につくとさらに完成度が高まることが期待できる。

7, 教科横断型・連携授業の実践2 演劇**(1) 連携授業の概要 「表現領域指導法（演劇表現）」における展開**

ここからは、2023年度に行われた「表現領域指導法（演劇表現）」（担当教員：高塩景子）における授業実践について紹介する。

- ・対象：A大学3年次1名
（科目「表現領域指導法（演劇表現）」（演習1単位 後期選択15回）履修者）
- ・実施場所：A大学講堂
- ・実施内容：表3参照

① 10/4	オリエンテーション	⑨	立ち稽古
② 10/11	質疑応答	⑩ 11/15	立ち稽古
③ 10/18	音読と身体表現	⑪	直し
④ 10/25	絵本から脚本づくり	⑫ 11/22	照明の説明
⑤	非日常（ドラマ）を加える	⑬	照明の操作・立ち稽古
⑥ 11/1	脚本づくり	⑭ 11/29	最終稽古
⑦	立ち稽古	⑮	発表・まとめ
⑧ 11/8	音づくり・小道具・舞台装置		

表3

(2) 授業の導入

履修学生の創作絵本（2022年に授業「表現領域指導法（美術）」の課題として制作）を基に、オリジナル脚本へ作り替え、観客の前で舞台に立ち、演劇で表現をする。

①脚本づくり

学生Lの絵本を基に、文字を書き出し脚本にする。脚本とは台本とも言い、「脚」「台」とつくように、芝居作りのための足場であり土台でもある。脚本「どんなかお？」の書き方は図4参照

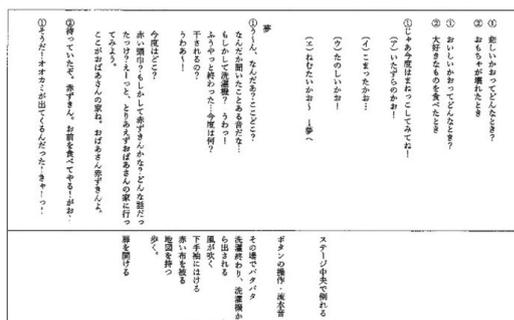


図4 「どんなかお？」脚本部分

②小道具づくり

絵本の絵を平面から立体に立ち上げる。絵本に描かれた「かお」をパネルにして、客席から見てもわかる大きさに作る。チラシの8つのかお（図5参照）を4枚のパネルの表裏に描き、持ち運び可能にする。

次に赤い布1枚を加工し、役替わりの変化として赤ずきんをかぶる。平面から立体に立ち上げるための視覚的效果となる。

③起承転結

起承転結の転＝ドラマ＝非日常を脚本に盛り込む。

起＝絵本「どんなかお？」の文字をそのままセリフにしていく。

承①＝問いと答えを逆にする。

承②＝かおパネルを持ちながら、顔の表情も加えて身体表現をする。

転＝夢の世界。主人公が洗濯物から赤ずきんになる。おおかみに追いかける。

結＝夢から覚めて現実に戻る。

④想像する音づくり

生音（なまおと）を利用した。楽器はレイNSTECK（筒状の中に砂等が入っていて上下に動かすと波の音や水の音に聞こえる）とサンダードラム（太鼓の片側に金属の動くヒモがついている。振るとヒモが太鼓の皮にあたって振動し雷のような音が出る）を使用。演劇表現として、演者が黒子（黒の紗の布の黒頭巾をかぶると、居るのが居ない存在）となり、その場で楽器を鳴らし、洗濯機の流水音や洗濯している音を表わし、聴覚的效果をねらった。このように、学生Lと担当教員の2人という状況での苦肉の策ではあるが、照明や音響ですべて説明するのではなく、観客の想像力を借りる形をとった。



図5 「どんなかお？」公演チラシ

⑤観客との一体感、時間空間の共有を体験する

ピーター・ブルック著『なにもない空間』（1981）の中で「どこでもいい、なにもない空間—それを指して、私は裸の舞台と呼ぼう。ひとりの人間がこのなにもない空間を歩いて横切る、もうひとりの人間がそれを見つめる—演劇行為が成り立つためには、これだけで足りるはずだ。」と書かれているように、演劇とは観客が必要である。演者と観客が舞台を通して時間と空間を共有し、一体感を得るという体験。生（なま）の舞台とは、終わってしまえば観客の心の中にしか残らないが、演者は観客に見てもらえたという達成感が残る。

2023.11/29の発表会は、外部より大人2名、幼児1名、小学生2名の参加があった。学生Lに経験してもらいたかった事は、一度もこの作品を見たことがない、どんな話かもわからない、まったく予備知識のない観客の前で、自分で創った作品を、自分の表現で、最後まで舞台に立ち続けるライブ感。何が起きるか分からないドキドキ感。間違うかも、失敗するかもという緊張感。そして、観客と一緒に創り上げたと感じられた時の一体感である。

公演後、学生Lは「とっても楽しかった。本番、自分でも良かったと思う」と感想を述べた。子ども達はかおパネルを出した時から反応があり、終了後も子ども達が舞台に上がり、かおパネルと一緒に写真撮影をしていた。「どんなかお？」の絵本が、演劇表現へと確かに教科を横断し、展開した瞬間だった。

8. 教科横断授業の成果と考察

「教科横断授業への展開」において、美術、音楽、演劇の授業担当者はそれぞれに教育的な視点を持ちながらも、プロフェッショナルの表現者の顔も持っている。その講師がそれぞれの専門分野における知見をもとに学生の創作をサポートしたことで、学生は新たな表現に挑戦し、模索しながらも創造の幅を広げていった。これは、同じ表現ジャンルにおける内容の深まりとはまた違った広がりであり、展開力の育成に大きく寄与したと考えられる。

9. おわりに

本稿では、小学校・幼稚園教諭、保育士養成課程における大学生の絵本制作の授業実践を紹介し、その教育的効果について検証してきた。絵本制作は、表現力（言葉、描画）、デザイン力（構成、色、文字）、創造力、思考力、企画・計画・遂行力、製本の技術などが身につく課題として有効であることが示唆され、また、作り手側の立場を経験することで、様々な工夫や趣向に気付くことができるようになり、新たな視点をもって保育・教育の現場で活用していく力の育成にも繋がったと考えられる。

また、一部の学生には、これまでに募らせてきた言葉にならない想いや公言できなかった気持ちなどを制作の中に込めることができた例もあった。制作を通して達成感を覚えると共にカタルシス効果やセラピー効果をもたらすこと、また、自己の振り返りとなることも確認できた。

加えて、この授業の成果物を他の表現の授業で活用した実践例を具体的に示し、教科横断的な学習の効果について考察したが、学生の表現活動における展開力の育成に寄与できることが示唆された。

今後は、表現の面白さを体感した学生たちが自らの表現を続けること、また様々なジャンルに展開できること、そしてその広がりを子どもにも伝えることを期待したい。

引用・参考文献

- ・文部科学省（2017）「小学校学習指導要領解説総則編」
- ・文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説」
https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_3.pdf（最終閲覧2024年10月30日）
- ・厚生労働省（2018）「保育所保育指針解説」
https://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/29-3s4.pdf#page=274.00（最終閲覧2024年10月30日）
- ・中山里美（2018）「総合的・横断的に領域『表現』を学ぶ授業の取り組み」富山短期大学紀要第54巻 pp83-93
- ・松井典子,高橋仁美（2018）「身体表現と音楽表現の融合を目指して」滋賀短期大学研究紀要第43号 pp.131-142
- ・藤井美津子（2019）「保育者養成校における表現指導の取り組みー授業の実践と学生の記録の分析から表現の深まりを目指してー」滋賀文教短期大学紀要21号 ,pp1-18
- ・吉野泰男（2020）「学生の主体的思考を育てる造形教材開発」植草学園短期大学第21号 ,pp.89-101
- ・ピーター・ブルック（1981）「なにもない空間」高橋康也・貴志哲雄訳 晶文社 ,p 7

The effects of picture book production classes in elementary school and kindergarten teacher and nursery teacher training courses

— Through the development of cross-disciplinary classes that incorporate music and drama —

Shoko Furuya^{*1} • Yoko Muraki^{*2} • Keiko Takashio^{*3}

Keywords :

Picture book production, interdisciplinary classes, art, music, drama, teacher training

(Affiliation)

* 1 Yamanashi Prefectural University * 2 Shobi University * 3 Kyohei University